

# 所格交替における構文の歴史的発達

石崎 保明

## 1. はじめに

所格交替動詞 load/spray は、目的語として(1a, 2a)のように場所句を置くことも(1b, 2b)のように物材を表す句 (locatum, e.g. hay, paint)を置くこともできる。ここでは、(a), (b)をそれぞれ「場所構文」、「物材構文」とよぶ。

(1) a. John loaded the truck with hay. [場所構文] b. John loaded hay onto the truck. [物材構文]

(2) a. Darren sprayed the wall with paint. [場所構文] b. Darren sprayed paint on(to) the wall. [物材構文]

本稿では、load と spray を例に、これまで議論されることのなかった所格交替に関わる 2 つの構文の後期近代英語(LModE)期における構文(変)化を議論する。具体的な主張は、(3)の通りである。

(3) I. (1, 2)に示される[動作主主語 + 定形動詞]構文はいずれも発達の初期段階では一般的でなかった。

II. 歴史的に[場所構文]の生起頻度が高く、かつ、[物材構文]は LModE 期までは稀であった。

III. load/spray の名詞以外の用法としては、「ある物材がある場所に置かれている・噴霧されている状態」を描写する形容詞的な使用が多く、その後、動作主を主語とする 2 つの構文が発達した。

## 2. 現代英語 (Present-day English (PDE)) における所格交替とその構文文法的研究

Goldberg (1995)によれば、load は(4a)のように動作主 (loader) 句がない場合は容認されず、(4b)のように場所句がなければ容認度が低くなるが、(5)のように物材(Goldberg (1995)では loaded-theme)の指示対象が文脈上明白な場合は省略可能となる。Goldberg はそのような参与者役割を definite null complement (DNC)とよんでいる。

(4) a. \*The hay loaded onto the truck. b. ??Sam loaded the hay.

(5) Sam loaded the truck. ((4, 5)は Goldberg (1995:178)より)

以上の分布から、Goldberg は(6)のように load が loader, container, [loaded-theme]という 3 つの参与者役割をプロファイル(太字で表示)していると主張する([loaded-theme]の[ ]は loaded-theme が DNC であることを表す)。

(6) load <loader, container, [loaded-theme]> (Goldberg (1995:178))

この観察に対して、Iwata (2005)や Croft (2012)は、Goldberg が??を付けた(4b)もまた、(5)と同様に、積み荷が積まれる場所(container)が明確ならば容認可能であると述べている。さらに、Iwata/Croft は(5)が物材を同定することなく容認可能となることから、loaded-theme(物材)は語彙的にプロファイルされる必要がないと分析している。よって、Iwata/Croft の観察では、load の参与者構造は(7)のようになる。

(7) load <loader [container] loaded-theme> (Iwata (2005:383))

Goldberg の(6)のような表示方法は、項構造における意味と統語との対応関係に焦点を当てたものであり認知文法の想定とは異なるものであるが、本稿では、その点を理解しつつ、Goldberg が定義づけているプロファイルに沿って(6)と(7)の表示の違いが load の歴史的発達に対してどのような帰結をもたらしているのかを探る。

Goldberg (1995)によれば、spray は(8)にあるように動作主(sprayer)の参与者役割がなくても成立する。また、(9)においては、物材(Goldberg では liquid)が DNC になると分析している。このような事実から、Goldberg は、(10)に示されるように、spray, 場所(Goldberg では target)と[liquid]という 2 つの参与者役割をプロファイルする、と分析している(Goldberg (1995:178))。

(8) Water sprayed onto the lawn.

(9) The skunk sprayed the car [ ].

(10) spray <sprayer, target, [liquid]>

Spray は target と物材をプロファイルし動作主の参与者役割をプロファイルしないという点で load とは異なる。しかしながら、もしこの分析に従うと、spray では、(11)のように、target の役割が具現化されなくても容認可能となることから、target の役割もまたプロファイルされる要素ではないという結論になりうる。

(11) The broken fire hydrant<sub>sprayer</sub> sprayed water<sub>liquid</sub> all afternoon. (Croft (2012:367))

Goldberg 流の分析の別の問題として、所格交替に関わる 2 つの構文が同等の資格を与えられ、物材(load では[loaded-theme]、spray では[liquid])が DNC になるという分析をしているが、それではなぜ、これらの参与者役割が DNC となっても項構造に含まれるべきなのか、という点についての実質的な言及はない。

## 3. CLMET (The Corpus of Late Modern English Texts, 3.1)を用いた調査

名詞 load が動詞として用いられるようになったのは初期近代英語(EModE)期以降であることから、本稿では LModE 期の資料を所蔵する CLMET で検出された 732 例の動詞 load の使用状況を調査した。その結果、用例全体の約 63%が with 句と共起する一方、to 関連語句と共起する例は 3 例(0.41%)にとどまり、両者には顕著な非対称性が観察された。また、動詞 load の用例の約半数(52.9%)は過去分詞として用いられており、LModE 期においては(1, 2)のような定形動詞として用いられる例は 17.7%程度である。つまり、load は、(12)に例示されるような[場所+loaded with+物材]としての使用がプロトタイプの用法であったといえる((12)は CLMET より)。

(12) At 10, the Trial's boat came on board, **loaded with gold and silver, corn, wrought plate, jewels, and rich moveable.**

他方、LModE 期において、spray が動詞関連の表現として用いられる例は 7 例のみであった(過去分詞 2, 定形動詞 2, 不定詞 2, 動名詞 1)。7 例のうち、with 句と共起する例は 4 例あった。これら 7 例の用例を詳しく見てみると、メタファ的な使用や演劇のト書きでの使用など、文脈依存的(臨時語的)な使用ばかりであった。

#### 4. 通時的構文文法に基づく分析

前節で見た load と spray の通時的発達から両者の共通点を整理する。まず、発達の時期は異なるものの、ともに名詞転換動詞であるが、その用法の基本は一貫して名詞用法である。また、極めて少ない spray の用例数から過度の一般化は適切でないとしても、名詞以外で用いられる場合は過去分詞形が多い。以上の 2 点から (13)に示される歴史的発達の過程が見えてくる。

(13) 名詞 > 形容詞(過去分詞) > (定形)動詞

さらに、両者は into/onto など方向を表す前置詞句と共起することは、LModE 期においてはほとんどなかったといえる。それぞれの用例全体の半数以上は with 句と共起する例であった。以上の共通性から、load と spray が動詞として用いられるためのプロトタイプとして、本稿では(14)を提案する。

(14) [場所(-be)] loaded/sprayed with [物材]

(14)において、場所と物材(積み荷や霧状の液体)の参与者役割は、それぞれ、認知文法におけるトラジェクター(TR)とランドマーク(LM)に相当する。つまり、load や spray が描く事態においては、動作主句は、本来、重要な参与者役割ではなく、積み荷や液体が噴霧される場所の状態を記述することが主要な目的であり、その目的を達するために、どのような物材が使われたのかを明示する表現であったと考えられる。

TR としての場所と LM としての物材という関係から、まずは動作主句が導入され、それを TR とした[場所構文]が発達する。しかしながら、この構文の発達には、load においては EModE 期以降、spray においては PDE における発達であり、ともに歴史的には比較的浅いものである。このことから、PDE においても(14)に示したプロトタイプの意味が根強く残存しているものと考えられ(プロトタイプ効果)、よってこの構文では、with 句が単なる付加辞ではなくあたかも項のようにふるまうことになり、項構造上の DNC にもなりうる。

(13)の範疇上の変化は、プロファイル・シフトによる品詞転換(すなわち文法化に抛らない構文変化)であると分析することができる。(1, 2)の用例は、(14)で提案されたプロトタイプにはない動作主に際立ちを与え、事態認知における TR としてプロファイルされた表現である。その結果、相対的に場所と物材の際立ちが降格(demote)することになる。歴史的に見ると、load や spray を含む構文においては、通常、動作主と場所が明示されるが、物材が明示されない用例は比較的多くある。他方、物材はその場所の状態を詳述するために必要な要素でもある。このような事態認知の変化により、まずは[場所構文]が発達し、その後、PDE に入って場所と物材とのメトニミ関係により、[物材構文]も発達したと考えられる。

上記の分析を念頭に load の語彙エントリーに関する Goldberg と Iwata/Croft の観察を説明するならば、Goldberg (1995)による(6)の意味役割の表示は、動作主と場所が義務的に統語構造に反映され、物材が DNC であることを示しているものであるが、このような意味表示は、[場所構文]がある程度発達・定着しつつも[物材構文]が未発達であった LModE 期における load の歴史的発達の段階においては妥当な観察であり、Iwata (2005)による(7)の意味役割の表示は、[物材構文]が発達し、[場所構文]と共存ないしは交替関係となった PDE においては妥当な一般化であるといえる。

他方、PDE の spray が load とは異なりかなり柔軟な構造を持っており、また歴史的にも PDE における発達であることから、spray の通時的構文変化については今後の課題としたい。

#### References (selected)

- Croft, William (2012) *Verbs: Aspect and Causal Structure*, OUP, Oxford.
- Goldberg, Adele E. (1995) *Constructions: A Construction Grammar Approach to Argument Structure*, University of Chicago Press, Chicago.
- Iwata, Seizi (2005) "Locative Alternation and Two Levels of Verb Meaning," *Cognitive Linguistics* 16-2, 355- 407.